

県西地区の中世城館 ―主要城郭の光と影―

大谷 昌良

茨城県西地域は、現在の行政区分では 10 市町で構成され、このたびの中世城館跡総合調査において対象とした遺跡の総数は 102 地点（城館跡）に及び、各市町別の状況（報告書掲載）は以下のとおりである。

古河市	結城市	八千代町	下妻市	筑西市	桜川市	五霞町	境町	坂東市	常総市
8	5	9	16	15	21	2	4	4	18

（各市町別調査・掲載城館跡数）

報告書に掲載された城館跡については、凡例に示されたように市町村から提出された調査カードを基本とし、地区担当調査員による現地踏査と情報の照合に依ったところである。ついで、堀や土塁によって区画された曲輪を有する**城館跡**、城館に関連するとみられる遺構を有する**関連遺跡**、明らかな遺構は確認できないが現地に言い伝えなどを残す**伝承地**、そして所在不明城館跡に大別区分して一覧表を作成したところである。

各市町を代表する主要な城館跡については、文献史料の記録とともに交通・交易や戦略上の要衝地に築かれるなど、歴史の舞台に登場する著名な城館跡ばかりではなく地域にとってはシンボリックな城館跡についてもリストアップして記述するに及んだ。その代表的な城館跡については、

古河市：古河城跡、古河公方足利成氏館跡

結城市：結城城跡、山川綾戸城跡

八千代町：太田城跡

下妻市：下妻城跡、大宝城跡

筑西市：久下田城跡、小栗城跡、関城跡

桜川市：真壁城跡、橋本城跡、坂戸城跡、羽黒山城跡

坂東市：逆井城跡

常総市：菅生城跡

などで、その城館跡の立地については多くが**平山城タイプ**として丘陵や台地、河岸段丘の先端部もしくは縁辺部に堀を切り土塁を築くなどしてさらには自然地形を活かして天然の要害とされるものである。また、**山城タイプ**は山腹もしくは山頂にその地形を活かし堀切と土塁によって築かれるものを見ることが出来た。この山城タイプは、桜川市（旧真壁町、旧岩瀬町）において見られる山間部で標高 100～200m 超えの地形的特徴を活かした築城形態である。

城館跡の調査に関しては、城跡に限ることなくいわゆる平地での居館跡の調査にも及んだところである。古河公方足利成氏館跡、磯部館跡、山川館跡、城内館跡、塩本本田遺跡、法戸氏館跡、館沢館跡、笹目館跡、江村館跡、村岡館跡、袋弾正居館跡、布川館跡、堀ノ内遺跡（東叡山承和寺跡）、御殿内遺跡、関本館跡、村田館跡、平良兼館跡などその多くが地元に伝承されるもので、その実態を明らかとする遺跡（館跡）は少ない。そうした中において、県内でも文献史料から初見とされる「館」が八田館（御殿内遺跡か？）である。同遺跡の周囲には、今も中世的な小字名を残し、遺跡に至る東に延びる直線道路は鎌倉（街道）の名を残している。史料としては『吾妻鑑』治承四年（1180）の記事で、頼朝が金砂

合戦で金砂城の佐竹氏を討伐し鎌倉への帰途に小栗十郎重成経営下の小栗御厨の八田館に立ち寄ったという記事に見ることが出来る。「城」ではなく「館」という日常生活の拠点となる場がこの当時住み分けられていたことを知る資料であるといえる。なお、遺跡は残念ながら圃場整備事業により湮滅している。

【地域に生きる城跡】

各地区を代表する城跡の中には、発掘調査を経て整備された公園として地域の憩いの場を提供するものや、早くから街中の公園として活用されてきたものがある。さらには、集落と一体となり生活の中に取り込まれた城跡もある。

中でも早くから都市公園的に地域住民との生活の中に溶け込んできたのが結城城跡、下妻城跡である。宅地化される中においても城郭の主要部（曲輪、堀、土塁など）を残している。また、大宝城跡や下館城跡などは寺社用地、学校用地

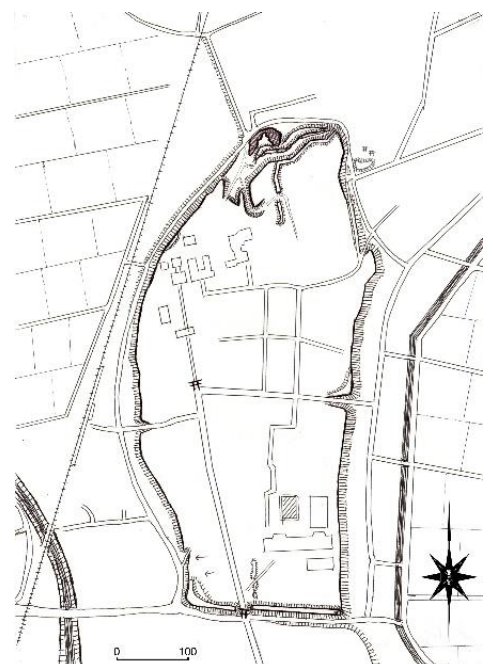


←下妻城跡縄張図

余湖浩一
2021.10

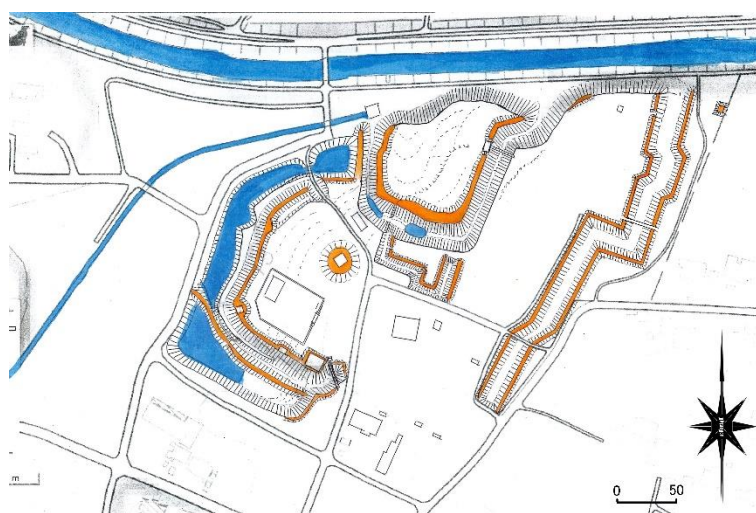
大宝城跡縄張図⇒

余湖浩一
2004.10



として今日に至り、古河城跡に至っては、城の主要部が調査されることなく河川の堤防工事により湮滅の憂いにある。

城跡の発掘調査により文献史料を凌駕する成果を上げているのが真壁城跡や逆井城跡である。文献では語られない歴史的事象をモノ（遺物）が語りかけてくれる、あるいは大地に刻まれた痕跡（遺構）により建物の存在・規模を目の当たりにすることが出来る。調査の進展にともない調査成果を現地説明会という形で開催し、地域住民と遺跡を結びつけてくれる。さらには、調査に基づいて史跡整備が試みられるなど中長期的な活用が図られる城館跡もある。昭和 57 年（1982）から 8 次にあたる調査が行われた逆井城跡は、平成 2 年（1990）から史跡整備が行われ、堀や土塁が整備され復元建物が配置されるなどして市民の憩いの場ともなっている。しかし、積年の経過により樹木の立ち枯れや剪定作業、



落ち葉や草刈りなどの維持管理作業、建物の老朽化などの問題も現実的に起こり始めているのが現状である。

逆井城跡縄張図 余湖浩一 2020.10

【忘れ去られる城跡】

城館跡の多くは、歴史の舞台から離れると同時に記録もなく人々の記憶から忘れ去られてしまう運命にある。重要な城は江戸時代に幕藩体制のもとに組み込まれて存続するも、中世城館の多くは廃城となり草木に埋れ山野と化している。文化財の指定を受けるでもなく、包蔵地として登録されればまだ救われるものの、多くは伝承地として地域の歴史舞台からも埋れてしまっている。

また、初期徳川政権の信頼あつく関ヶ原の戦い以後も常陸国内では唯一、城も所領も安堵された水谷氏に係わる久下田城跡に至っては、平成 25 年（2013）5 月、本丸にあたる曲輪Ⅰに所在する稲荷神社が放火され周囲の樹々ともども焼損して現在も立ち枯れのままの状況にある。さらには令和 2 年（2020）7 月に



久下田城跡縄張図 遠山成一（稲葉修氏図を参考に作成）

2022.1.26、12.27

は、曲輪Ⅱ・Ⅲをはじめとする曲輪Ⅰを除く城跡のほぼ全域が伐開され、堀底・土塁・腰曲輪に至るまであらわとなった。現在、文化財指定区域の曲輪Ⅰを囲むかのように曲輪Ⅱと腰曲輪、曲輪Ⅲに至るまで太陽光パネルの波に覆われてしまい、景観を大きく損ねてしまっ

いる。またそれ以前に真岡市側の区域ではあるが、城の南西部、かつては外堀の低地部にも広範囲にわたり太陽光パネルの設置がなされている。もはや遺跡であることが忘れ去られようとしているかのようである。

【おわりに】

さて、地域のシンボルたる遺跡として城館跡を取り上げる場合、ただ単に遺跡を指定の運びに供するだけではなく地域からの育成を図らねばならない。地域の歴史への関心を地元から呼び起こすこと、さらには長く遺跡にかかわりを持ってもらうことが大事である。こうした場合、「〇〇を守る会」などと保存会が立ちあげられる場合が多い。しかし、文化財の指定が無ければ、行政からの積極的な支援はなく、やがて保存会も解散の憂いを見るという事例が多くある。

守る会の活動だけではやがて来る後継者の不足、構成年齢の高齢化からくる活動の弱体化を招きやすく、行政自治体においては是非とも専門職員の配置と文化財の活用策の策定、しいては広域連携による地域文化財の保存活用策のもとで団体の育成と支援を図られたい。このたびの報告書を手掛かりに地域のシンボルの再発見と広域的な保存活用、そして地域に根差した文化財を叢とすることなく活用していただきたい。

主要参考文献

- ・茨城県教育庁総務企画部文化課『茨城県の中世城館』茨城県教育委員会 2023 年
- ・茨城城郭研究会『改訂版 図説 茨城の城郭』国書刊行会 2017 年
- ・峰岸純夫・齋藤慎一編『関東の名城を歩く 北関東編』吉川弘文館 2011 年